

《特集》都市と建築の美学

都市とオリンピック

都市の美学と新たな景観

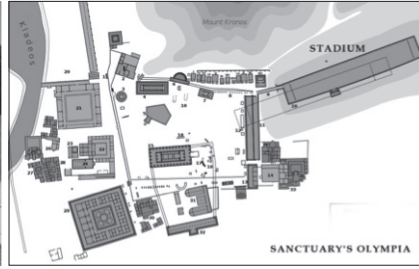
一、オリンピック…オリンピック競技の芸術と建築の美学

「オリンピック（*Ἰσθμια*）」という都市の名前はみなさんご存知のことでしょう。古代ギリシアの都市の名前で、ペロポネソス半島の北西、アルペイオス川沿いに位置するオリンピックは、都市ピサ（*Πίσα*）に隣接し、西ギリシアの三地域の一つであるエリスという地方に属します。オリンピックの名前は、オリンピックから七〇キロメートルほど北にあるエリスの都市で紀元前七七六年に生まれた陸上競技「オリュンピオニクス（*Olympionikes*）」に結びついています。ここで、ゼウス神の名の下に最初の試合が行われました。これらの競技は四年ごとに行われたため、ギリシア人たちはこの行事を歳月の経過を計るために用いていました。同時にその競技は、開催中きわめて宗教的な価値を有したので、戦争が行われているあいだは中止されました。キリスト教の到来とともに、オリンピックの競技は「異教の」行事とみなされることになります。このた

め、紀元後三九三年、ローマ皇帝テオドシウス一世は試合の実施を禁止しました。こうして、千年以上も続いたオリンピックの歴史は終焉を迎えたのです [Nicholas Yalouris, 1997]。

しかしながら、オリンピックの都市は歴史家や哲学者たちの著述を通じて生き続けました。なぜならこの都市は、ドイツの歴史学者ヨハン・グスタフ・ドロイゼン（一八〇八―一八八四）が考案した用語を用いるなら、ヘレニズムの祖国であると考えられていたからです。ヘレニズムとは、地中海におけるギリシアの文化的・歴史的拡張にとって重要な意味を持った時代、とくにマケドニア王アレクサンドロス大王（紀元前三五六―二三三）が覇権を握った時期を指しています。この文化的繁栄と拡大の時代にあつて、ギリシア文明は、「テクネー」すなわち自然を変貌させる人間の手の能力と、「ポイエーシス」という、美学（感性の学）および美についての趣味に結びついた芸術的才能を区別した最初の文明でもありました。もっとも重要な美学理論は、プラトン（紀元前四二八―三四八）やその弟子でアレクサンドロス大王の師であつたアリストテレス（紀元前三八四

オリンピック・ニリオ



オリンピアの古代「競技場」、現在の様子（左）と競技エリアの場所を示した聖域の地図を再構成したもの（右）（発表者蔵資料）

—(三二二)—によって練りあげられました。「美学 [Aesthetics]」という言葉は、「感覚 [aisthesis]」というギリシア語から生まれ、感覚をもった人間の特徴を示しています。つまり、聴き、感知し、感情や感覚を覚えること、すなわち感覚器官の媒介によって知覚することです。自然とみずからを関係づけるこの高度な感覚能力は、ギリシア文化において、芸術的表象にも、新しい都市の設計にもはつきりと見て取ることができます。

一七六三年にヴィンケルマンによって開始され、その後も二〇世紀半ばまで続けられたオリンピアの都市のもっとも重要な考古学的発掘は、そうしたギリシア文明の偉大な才能に光をあてることになりました。自然観察に結びつくその才能は、芸術作品や建築物の私たちにとって現れます。たとえば紀元前五世紀後半、ヘレニズムの競技を行うために建設されたオリンピアの「競技場 [stadium]」は、一九五八年以降にドイツ人の考古学者たちの指揮の下で発掘が開始されてから、ようやく文書資料に

現れるようになりました。

この競技場は、聖地の北、都市の境界の外にあり、その場の地形的特徴に緊密に関連づけられています。実際、ギリシア文化の感性によって今に伝えられる芸術作品や構造物は、自然環境や土地の特徴とつねに緊密かつ有機的な対話をなすよう設計されており、驚嘆すべきほどです。巨大なスポーツ場の場合にも、必ずそれが建設される場所に上手く文脈づけられているのです。二〇一二年にベルリンのマルティン・グロピウス・バウで開かれた展覧会「オリンピア——神話、文化、競技」は、自然と美に結びついたヘレニズム文化の競技のために、都市がどのようなプロジェクトを実施したのか、その理解を深めるまたとない契機になりました [Hans-Joachim Gehlke, Wolf-Dieter Heilmeyer ed alii, 2012]。事実、ギリシア文明の美的資質は、人間が芸術や建築に積極的に参加するのを可能にしてきたのですが、そのように共有された資質は、個人だけではなく共同体の次元でも生じました。したがって美学は、ある主体が芸術や建築に接したときの反応に結びついた心理学的価値を示していただけではないのです。それと同時に美学は、芸術作品についても、新しい建築物についても、相応に広い範囲の集団の態度を分析することが可能になるという意味で、社会学的価値をも示していたのです。この心理学的・社会学的性質の美的価値は、今日もなお、古代の芸術作品・建築物の観察、およびそれを感じ覚的に共有する際に有効なものです。

二・三〇世紀のオリンピック都市計画とイメージの建築

紀元後三九三年にヘレニズム文化の競技が完全に終わりを告げた
あとも、オリンピックの古代都市に結びついた運動競技が完全に途絶
えることは実際にはありませんでした。事実、一七世紀にはヨーロッ
パの様々な国でオリンピック大会の名を冠したスポーツの祭典が行
われました。けれどもそれは、インターナショナルというよりはナ
ショナルな性格をもった小規模なイベントでした。古代ヘレニズム
の競技を新たに受け継ぐという関心が真に生まれるのは、一九世
紀の終わりにドイツの派遣団がオリンピックの古代都市で大量の出土
品を発見した事実が明るみに出たときのことです。

フランスでは、教育学者であったピエール・ド・フレディ・クー
ベルタンが、諸民族が互いに歩み寄ることを目指した、国際的な性
格の競技を新たに実現させようと、最初の提言を行いました。クー
ベルタンは、オリンピック村を最初に推進した人物でもありました。
一八九四年六月二十三日、パリのソルボンヌ大学で国際オリンピッ
ク委員会が設立されました。近代で最初のオリッピック大会がこ
に宣言され、一八九六年にギリシアのアテネで行われることになっ
たのです。この時から、主として第二次世界大戦による中断を除い
て、オリンピック大会はいつも四年毎に、異なる国で開かれるよう
になりました。

歳月の経過とともに、オリンピックはますます派手な様相になり、
開催都市の変貌のポリテクスになりました。とくに二〇世紀に
あって、世界の多くの都市の政治は、国際的なイベントに大きく左
右されるようになります。エキスポとオリンピックは、都市の機能
とインフラの変容プロセスを示す二大例です。とりわけオリンピッ
クについては、「オリンピック都市計画 [Urbanistica Olimpica]」が

ますます語られるようになってきています。それはつまり、オリン
ピックによって都市構造が変容し、インフラの整備やスポーツ・収
容施設の新しい建設が進むこと、さらには催事に建設された建物
を国際競技の会場として再利用することを指しています。

これらの重要な運動競技が、いかに開催都市の近代化を促す契機
になったかは、二〇世紀の歴史が物語っています。すなわち、参加
国の急激な増加と、それに伴うアスリートとその関係者の増加に
よって、規模も機能も巨大なプロジェクト、つまりはオリンピック
村が生まれることになったのです。

オリンピック村は、都市の変貌のきわめて特殊なケースを示して
います。というのも、一方でそれは、選手の歓待のために複合的な
建設物を含む新しい都市の区画を創出するわけですが、他方では、
オリンピック終了後もその土地の要請や政治的な必要性と緊密に関
連しながら相応しい方法で再利用されるよう、始めから設計されて
いなければならないからです。

とりわけ二〇世紀後半から、オリンピック村の計画は、都市の未
来をどのように設計するのか、さらには、オリンピックのための建
設物をいかに運営・再利用するのかを考えるための有益な機会にな
りました [Beatriz Garcia, 2002]。しかしながら、わたしたちは古代
ギリシアのオリンピック村からはるか遠くにいます。すでに見たよ
うに、古代ギリシアでは、巨大な建築は都市部の外に計画され、適
切に位置づけられていました。そのような古代ギリシアの美学とは
異なり、二〇世紀のオリンピック都市計画では、既存の都市との統
合や改良を目指す対話よりも、イメージや表象を設計することの方
にむしる精力が傾けられてきました。したがってそれは、土地の再

利用にいつも結びつくとは限りません。

こうして将来を見通したのではなく、一時的に状況を解決するための建設物の計画がますます増殖するようになります。実際、美学の諸原理がイメージの文明に一步を譲ったかのような介入が行われたのです。イメージの文明もまたギリシア語の「模倣すること[mimēōn]」に由来し、真似ることや複製の芸術を意味していました。けれどそれは、制作者としても享受者としても、芸術を客観的に企図し、評価し、参加し、批判するというギリシア起源の感覚の美学とは、ほとんど関係しません。そうした感覚の美学とは異なり、模倣の芸術は、しばしば文脈をはずれた奇妙な解決を生み出してしまい、共同体とその土地の未来にとって必ずしも喜ばしくない結果をもたらすことになったのです。

三二〇世紀のオリンピック村に関するケース・スタディ

とはいえ、このようなイメージと表象にだけ結びついた都市の政治を一般化してしまうのは正しいことはありません。オリンピック村の計画・建設に関する歴史を繙けば、都市およびインフラの改良と、オリンピックのための施設、および既存の建物の適切な再利用とに決定的な貢献を果たした介入についても考察できるようにするのがです [Francisco Manuel Mufoz, 1997; G. Greslery, 1994]。

二〇一四年までに国際的競技大会に関わった都市のケースを個別に分析してみると、これらの都市は、それまでとは全く異なった方法で既存の都市の構造に相互作用を及ぼすような計画が行われた点で特徴的でした。さらに、そのうちのいくつかのケースは、都市の

文化的・経済的・政治的変容のモデルを提起していただいたのです [Benamy Turkienicz, 2010; Essex e Chalkley, 2010]。

第二次世界大戦前の興味深い二つの事例は、ロサンジェルス(一九三二)とベルリン(一九三六)のオリンピック村です。

この二つは、国際的な運動競技のための重要な初期の実験例で、その後、新しいオリンピック都市のモデルになりました [Brandizzi, 1988]。

ロサンジェルスとベルリンに実現されたオリンピック村は、スポーツのために計画されながらも、その都市の将来のインフラと機能的な要請を考慮

した点に特徴がありました。両ケースにあつては、古代オリンピックのように、新しいプランニングが都市部の外に導入され、その土地の環境と形態の特徴が尊重されたのです。確かにベルリンの場合そ



ベルリン、一九三六年。デーベリッツのオリンピック村の全体図、IOC・オリンピック博物館コレクション [Olympic Villages. A Hundred Years of Urban Planning and Shared Experiences, Lausanne 1997, p.61]



ロサンジェルス、一九三二年。オリンピック村の全体図、IOC・オリンピック博物館コレクション [Olympic Villages. A Hundred Years of Urban Planning and Shared Experiences, Lausanne 1997, p.57]

と結びつくことを目指していました。

「有機的」と定義できるこれらの都市計画の例に、土地との強い



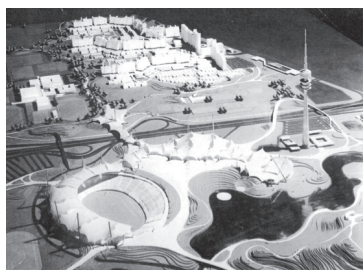
ローマ、一九七〇年。オリンピック村の宿泊施設、IOC・オリンピック博物館コレクション
[Olympic Villages. A Hundred Years of Urban Planning and Shared Experiences, Lausanne 1997, p.66]



東京、一九六四年。オリンピック村全体図、IOC・オリンピック博物館コレクション
[Olympic Villages. A Hundred Years of Urban Planning and Shared Experiences, Lausanne 1997, p.66]

れは、ナチズムの政治的目的と強く結びついていたのですが、その当時オリンピック計画が有した社会的価値に疑いの余地はありません。

一九六四年にオリンピックが行われた東京は、この有機的で機能的なプランニングのモデルの重要な応用例です。そこでは、その土地の伝統的な建築の性格に合致した建築的類型が選択され、都市計画が提示した解決案は、今日なおも国立競技場の区域を特徴づけている環境の文脈へと、調和を保ったまま取り入れられています。実際、東京オリンピックで選択された解決は、脱文脈化された形態を押し付けるのではなく、むしろ既存の都市のデザイン



ミュンヘン、一九七二年。オリンピック公園、オリンピック村の模型、IOC・オリンピック博物館コレクション
[Olympic Villages. A Hundred Years of Urban Planning and Shared Experiences, Lausanne 1997, p.67]

結びつきを放棄しはしないものの、より機能的な目的を持った計画が続くことになります。ローマ（一九六〇）、メキシコ・シテイ（一九六八）、ドイツのミュンヘン（一九七二）は間違いなくそうした機能的な計画の例です。これら三つの都市の例では、正確に区画分けされた独立した都市地区があり、そこでは住居が標準化されたブロックによって統一的に分けられ、広い公共空間と都市の緑を有しています。オリンピック村は、そうした都市地区を活性化させようという意図のもとに生まれました [Piero Ostilio Rossi, 2012]。たとえばメキシコ・シテイのケースでは、スポーツ施設がメキシコ国立自治大学の巨大なキャンパスに連結していました。これら三例のオリンピック村は、今日も広大な住宅地区として存在しており、住民のコミュニティによって高く評価されています。ミュンヘンの場合には、共同行事に結びついた利用もされています。

しかしながら、一九七〇年代から主として西洋の建築文化は、一時的な消費、エフェメラル、余暇の神話といったものに深く特徴づけられていました。この時から、内実よりもむしろ表象とイメージへの志向が、都市の政治をいっそう強く特徴づけていくことになります。この特徴は、大規模な国際的イベントの機会に独自の仕方で行われる新しい地区の計画化についてだけ



バルセロナ、一九九二年。オリンピック村とオリンピック港（発表者蔵資料）

なく、既存の都市の変容と再組織化についても同様に認めることができます。オリンピック村の新しい計画は、ますますイメージを促進し、スペクタクル化を押し進める不毛な機会となっていました。それはまた、エフェメラルなコマースシャルであり、開催都市の条件を改善し、有効利用をもたらすことを目指したオリンピック都市計画の、現実的で具体的な好機を考慮することはありません。

とはいえ、二〇世紀の終わりにあっても、未来の都市を建設するのに大きく寄与するような先進的な計画性をもったオリンピック村がないわけではありません。疑いなく重要なのは、韓国のソウル（一九八八）、およびスペインのバルセロナ（一九九二）の二つの例です。ここでは、オリンピックのプロジェクトが、都市の政治と諸機能の脱中心化、および既存の都市構造の有効利用のあいだに建設的な対話を取り持つことで、とりわけ問題を抱えた区域を再生することを可能にしたのです。こういうわけで、一九九二年のオリンピック開催は、バルセロナにとって素晴らしい機会となりました。バルセロナのプロジェクトは、土地の再評価とローカルな資源の有効活用、公的空間の改善による都市

の変容が、ローカルなコミュニティのスポーツに関する要請と完全に調和しつつ、いかに広範な国際的重要性を都市に付与しうるかを示すことになったのでした。ソウルの漢江にある蚕室（チャムシル）とバルセロナの海岸通りの二例は、都市の機能を回復するための介入例を示しています。ここでは、計画の創造性と強い社会的コンテクストが将来を見通しています。それによって、偽の一時的な表象をまとった、ユートピア的でエフェメラルな構造を計画させないようにするのです。しかしながら、そうした偽の構造物はむしろ、オリンピック都市のプロジェクトの路線を特徴づけてきましたし、残念ながら今後もそうでありつづけるのですが[Ricard Fayos Malet, 2010]。

四・現代のオリンピック都市における美学の危機

ここ数十年、国際的な建築のコンペから生まれたオリンピック村のための大規模なプロジェクトは、古代ギリシアの感覚の美学の文化を深刻な危機に追いやったのでした。大規模な国際的イベントがそれぞれの都市にもたらした解決は、それが共同体と都市の未来の状況についての内容的価値よりも、むしろプロジェクトを手がける建築家の名前という、一時的でコマースシャルな価値しかもっていないということを示しています。実際ここでは、美的内容よりもむしろ、あるイメージを提供し、販売することを目的とした新しい景観が生まれたのです。しかし、美的内容とは本来、オーストリアの美術史家アロイス・リーゲル（一八五八―一九〇五）が二〇世紀の始めに「芸術意欲 [Kunstwollen]」と定義した芸術の意欲、芸術的制



北京、二〇〇八年。オリンピック村とオリンピック競技場（発表者蔵資料）

作（建築的・都市的制作用言）もできるでしょう）の自覚的な結果であり、それは実践的な目的や現実の直接的観察からやつとすることで生まれるのであって、偶然に生まれる純粋に功利主義的な立場から導かれるものではないのです。

意義深いのは、二〇〇八年の北京でのオリンピックのケースです。オリンピック村は、奥林匹克森林公园（オリンピック森林公園）の近くにあり、二〇〇八年のオリンピックのために新たに行われた介入によって影響をうけた地域のうち、四〇パーセントを占めています。北京は環境条件が劣悪であったために、緑地帯のための空間をオリンピック村の内部に広範にとるよう介入が進められました。また、環境の再評価についてのさらなるプロジェクトも推進されましたが、それは市民に喜ばしい結果をもたらしてはしませんでした。巨大なオリンピック競技場が予想外の支出を要したと同時に、プロジェクトの目標は、十分に満足のいくほど達成されなかったからです。これらの局面は多くの問題のごく一部にすぎません。しかもそうした局面は、レンダリングされた表象のうちにも、最新の情報工学によるシステムで修

正された写真にも現れることのないものです。それでいて、こうしたスペクタクル化は、現代都市の新しい美的文化のエンブレムになっているのです。

もちろんわたしたちは、美術批評や造形芸術にその文化的起源を持つ都市の感覚の美学から、かなり隔たったところにいます。感覚の美学は、もっぱらここ四〇年のあいだに、その厳密な分析的・客観的方法論のおかげで、強い科学的価値を帯びるようになりました【Marco Romano, 2004】。都市の美学の歴史はわたしたちに、都市とは芸術作品であり、つまりはリーグルが主張したように自覚的な「芸術意欲」の結果であるという、基本的な前提を教えてくれます。わたしたちの共通経験は、この主題について熟考を促すと同時に、世界の様々な文化的文脈にあって、エフェメラルで一時的なイメージの概念に空間を与えるよりも、明らかに文化的・社会学的意図に基づいた美的原理の分析に立ち戻ることがいかに重要であるかを、改めて考えさせるのです。今日わたしたちは、何世紀も経たあとであっても、過去の都市に目を向けることによって、モニュメントの価値や、それらを生み出した芸術的・建築的意欲、都市の形態的価値について広く考察することができます。だとすれば、同様にしてわたしたちは、現実の美的知覚を刺激し、明らかに象徴的価値を有する重要な公共空間を創出し、はっきりとした文化的特徴を持つ都市を未来に委ねるような都市計画に立ち返らねばならないでしょう。

以上のわたしたちの観察をこうした重要な側面に引き戻すなら、次のことに気づくのは難しいことはありません。つまり、オリンピック都市の計画もまた本来、ある土地の必要性を知覚し、聴きとり、観察する能力にしっかりと裏付けられた美的意欲によって特徴

づけられていましたが（古代のオリンピックのことを考えましょう）、そうしたすべてはその後、イメージの政治に取って代わられることになったのです。そこではすべてが、その土地の社会的文脈を度外視して、いつそうスペクタクル的な仕方でのみ、別次元の現実を模倣し再創造しようとしています。こうしてわたしたちは、二〇二〇年の東京オリンピックのプロジェクトの場合のように、新しいイメージの構築を目撃することになります。これは新しい美学でもなければ、ましてや新たに文脈化された現実の都市でもありません。

実際、一九六四年にアジアで最初のオリンピックが開催された国立競技場は、首都内部に結実した建築的現実を代表しているにもかかわらず、東京都はその取り壊しを準備しています。その一方で日本の文化界・学術界は、本発表でたびたび述べてきた美学的理由から、二〇二〇年の競技会について予定されている未来主義的で途方もない介入が日本の首都を活性化し価値を高めることに寄与できるのかどうか、その具体的な可能性について批判と困惑を強めています。事実、現在の国立競技場は、文化・自然において深く特徴づけられた文脈に置かれています。北には新宿御苑、西には渋谷の明治神宮、東には明治神宮外苑競技場、そして東宮御所と赤坂離宮があります。つまりそれは、東京という都市のうち、自然的・文化的に非常に価値ある公園の存在によって深く特徴づけられた広範な地域なのです。こうした具体的で明らかな理由があるために、広範な心理学的・社会学的内容に結びつくような都市計画と建築に、空間を返してやる必要があります。都市計画と建築は、明確な「芸術意欲」の鏡として、場の必要性を聴き取り、共同体の要求を感じ、知覚することのできるものであり、新しい介入計画を、すでに



一九六四年夏季オリンピックが開催された国立競技場
東京タワー、東京ミッドタウン、東京湾の眺め（発表者蔵資料）

存在し、日本の首都にとって大きな価値を有する環境と関連づけることができるのです。

そして、まさしくこれらの主要な文化的・環境的課題への参照によってこそ、わたしたちは、美学（感性の学）の価値についての反省に立ち返り、もはや少数の選ばれた人々の想像上の産物に委ねられることのない、美学に基づいたわたしたちの都市の未来を構築せねばならないのです。それはまさしく、活発で現実的な感性的共同参加の具体的な成果にほかなりません。

この美的・文化的価値の重要性についての確信を深めるために、結論として、美的価値に関するブルーノ・タウトの一九一九年のメモを引用しましょう（言うまでもなくタウトは、一九三三年から一九三六年にかけて日本に暮らしたドイツの建築家です）。

「……」建築は、人間の存在にとって根源的な役割を帯びている。その役割とはつまり、芸術的形態で実用的な要求を満足させることのできる「美的目的」である。人間の願望が単なる実用的な必要性を超え出るとき、生活に高い質を求めるときにこそ、はじめて建築は、その本質において大きく立ち現れる。「……」これこそ、概して、現在の建築とその信奉者たちが直面せねば

ならない考えである。[……] 形態と内容の照応だけでは十分ではないのだ。形態についての遊戯は、そうした照応を超えたところで、人間の視野を押し広げ、その美的目的を追求せねば

参考文献

- Brandizzi, Giovanni (1988) «Architecture and the Games» in *SpazioSport*, 3, pp. 166-181.
- Essex, Stephen; Brian, Chalkey (2010) : *Urban transformation from hosting the Olympic Games: university lecture on the Olympics* [online article].
- Barcelona: Centre d'Estudis Olímpics (UAB) . International Chair in Olympism (IOC-UAB) . [Date of consulted: 28/05/2014] . http://ceo.uab.cat/pdf/essex_eng.pdf.
- Fayos Malet, Ricard (2010) «Plans, Projects, Events, Barcelona 1992-2012», in ARQTEXTIO, Faculty of Architecture Porto Alegre, Brasil, n° 17, 2010, pp. 124-137.
- García, Beatriz (2002) : *The Concept of Olympic cultural programmes: origins, evolutions and projections: university lecture on the Olympics* [online article].
- Barcelona: Centre d'Estudis Olímpics (UAB) . International Chair in Olympism (IOC-UAB) . [Date of consulted: 02/06/2014] [<http://olympicstudies.uab.es/lectures/web/pdf/garciapdf>]
- Gehrke, Hans Joachim, Dieter Helmeyer Wolf, Kalsas Nikolaos, Hatzí
- Georgina E. and Bocher Susanne (2012) *Olympia: Mythos, Culture and Games*, catalogue of the exposition in Berlin at the Martin-Gropius-Bau Museum (from August 7, 2012 to January 13, 2013) , Prestel Verlag München.
- Gresley, G. (1994) «La Ciutat Mundial» in *Visions Urbanes. Europa 1870-1993- La ciutat de l'artista. La ciutat de l'arquitecte*. Barcelona : Centre de Cultura Contemporània de Barcelona, Electa, p. 164-166.
- Yalouris, Nicholas (1997) «The City of Elis. The Primordial Olympic Village», in Miquel de Moragas, Montserrat Llinés, *Olympic Villages. A Hundred Years of Urban Planning and Shared Experiences*, Lausanne, pp. 23-26.
- Muñoz, Francesc Manuel (1997) , *Histoire Evolution and Urban Planning Typology of Olympic Villages*, in Miquel de Moragas, Montserrat Llinés, *Olympic Villages. A Hundred Years of Urban Planning and Shared Experiences*, Lausanne, pp. 27-52.
- Romano Marco (2004) , *Costruire la città*, Skira, Milano.
- Rossi, Piero Ostilio (2012) . Roma. *Guida all'architettura moderna 1909-2011*. Laterza, Roma.
- Turkenciz, Benany (2010) «The urban esthetic as policy», in ARQTEXTIO, Faculty of Architecture Porto Alegre, Brasil, n° 17, pp. 192-215.

ならない。
ブルーノ・タウト『都市の冠 (Die Stadtkrone)』一九一九年
(訳／池野絢子)